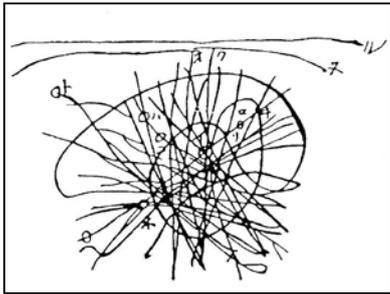


第4章 南方熊楠「萃点の思想」と「事の学」①

第1節 南方曼荼羅と「元の理」

まず、内発的發展論で著名な鶴見和子(1918～2006)著『南方熊楠・萃点の思想』(藤原書店、2001年)の冒頭に引用してある中村元がいう南方「曼荼羅」と、南方の「萃点」の思想が初出する、近代日本を代表する真言密教僧土宜法龍(1854～1923)に宛てた南方熊楠(1867～1941)の書簡の文章を紹介しておきたい。曼荼羅とはサンスクリットの音訳で、漢字には意味はなく、語源は形容詞で「丸い」という意味があり、完全・円満・本質を意味するチベット発祥の伝統的芸術としても知られる。マンダは本質、ラは所有を示す接尾辞でマンダラは「本質を所有せしもの」を意味する。ここで引用するのは、南方熊楠のいわゆる曼荼羅と言われる原型図



(図1)

とその説明文である(図1)。この土宜法龍宛ての書簡に秘められた曼荼羅思想は、南方の壮大な東西を包摂する哲学実践思想の中核となり、今日的可能性と無限に広がる南方の宇宙の核心を照らすものと評価されている。

ちなみに南方曼荼羅からは、〈元の理〉の象徴を包摂している「このところ」(萃点)であるとわたくしが考える「ちば」甘露台のかたちの意味を、①「規矩」をもって読み込んだ蔵内数太の構造的解釈(『泥海古記について—中山みきの人間学』赤心社、昭和54年)、②諸曼荼羅の歴史分析を通して「元の理」は「にほん」の稀有な曼荼羅であるとした元真言宗高野山管長である松永有慶の論(『「元の理」の象徴学』講座2「元の理」の世界、「元の理」と密教、天理やまと文化会議、77～97頁)、③中沢新一が解説する宇宙存在全体に躍動する「ポリフォニー」文明論(『森のバロック』講談社学術文庫、388～405頁)などを援用することによって、天理教学の未来パラダイム転換・構築に向け、グローバルかつ学際的な思想展開の「事」化を期待している。つまり、「元の理」マンダラの構築である。関連論考としては、④拙著『中山みき「元の理」を読み解く』、第四章「「元の理」の比較文明論序説」557～572頁、日本地域社会研究所)などを参照されたい。

南方は法龍に返信する。「ここに一言す。不思議ということあり。事不思議あり。物不思議あり。心不思議あり。理不思議あり。大日如来の大不思議あり。余は、今日の科学は物不思議をばあらかた片づけ、その順序だけざっと立てならべ得たることと思う。……これらの諸不思議は、不思議と称するものの、大いに大日如来の大不思議と異にして、法則だに立たんには、必ず人智にてしりうるものと思ふ。……この世間宇宙は、天は理なりといえるごとく(理はすじみち)、図のごとく……前後左右上下、いずれの方よりも事理が透徹して、この宇宙を成す。その数無尽なり。故にどこ一つとりても、それを敷衍追求するときは、いかなることをも見出し、いかなることをもないうようになっておる。その抄(はかど)りに難易あるは、図中(イ)のごときは、諸事理の萃点ゆえ、それをとると、いろいろの理を見だすに易くしてはやい。……すなわち図中の、あるいは遠く近き一切の理が、心、物、事、理の不思議にして、その理を(動かすことはならぬが)道筋を追従しえたるだけが、理由(実は現象(げんしょう)の総概括)となりおるなり。……さてすべて画にあらわれし外に何があるか、

それこそ、大日、本体の大不思議なり。)(『南方熊楠 土宜法龍 往復書簡』八坂書房、307～309頁。傍点鶴見)

核の周りを動く電子の軌跡のような線と、そこにクロスする直線。南方は、すべての現象が1カ所に集まることはないが、いくつかの自然原理が必然性と偶然性の両面からクロスしあって、多くの物事を一度に知ることのできる点「萃点」(イ)が存在すると考えた。鶴見は南方のこの曼荼羅を、チャールズ・パース(1839～1914)の「実存的偶然性」の概念や、さらにはジャック・モノー(1910～1976)の『偶然と必然』とに共通する、「世紀の変わり目のパラダイム転換の予兆であった」と高く評価している。そして「萃点」は、「さまざまな因果系列、必然と偶然の交わりが一番多く通過する地点……そこから調べていくと、ものごとの筋道は分かりやすい。すべてのものはすべてのものにつながっている。みんな関係があるとすればどこからものごとの謎解きを始めていいかわからない。この「萃点」を押さえて、そこから始めるとよく分かる」という。しかし「萃点」は、中心ではないと『南方熊楠・萃点の思想』(165頁)において鶴見は松井竜五との対談で力説している。「中心にあると命令することになる、天皇制みたいになる。そこですべての人々が出会う出会いの場、交差点みたいなもの……非常に異なるものがお互いにそこで交流することによって、あるいはぶつかることによって影響を与えあう場—それが萃点であるというわけだ。ちなみに引用文の「図のごとく」以下「前後左右上下」間の省略文章には(図は平面にしか画きえず。実は長(たけ)、幅の外に、厚さもある立体のものとも見よ)、とあることを付け加えておきたい。南方の曼荼羅図にはつねに立体的透視が必要だからである。また曼荼羅図説明文において鶴見が省略している文章で、南方は諸事理の「萃点」について次のように述べている。「(ロ)のごときは、(チ)(リ)の二点へ達して、初めて事理を見出すの途に着く。それまではまずは無用のものなれば、要用のみに汲々たる人間にはちょっと考え及ばぬ。(ニ)また然り。(ハ)ごときは、さして要用ならぬことながら、二理の会萃せるところゆえ、人の気につきやすい。」つまり、ごちゃごちゃと、線が描きこまれているところは、「可知」の空間であり、「の」のような現象になると、それを知る手掛かりがない。しかし「理不思議」の力は「ル」に象徴される未知のものの存在を予測・予言することができるという。

南方熊楠はたぐいまれな粘菌研究をはじめとした十数カ国語を読み書き出来るグローバルな民俗学者、超奇人的・天才的活動家としても知られる。交流のあった柳田国男は日本のローカルな民俗学者であったが、南方は世界の民俗学を幅広い歴史的な研究を通して、膨大な粘菌研究をはじめとした植物学、社会学、比較宗教学等の研究、はては過激な神社合祀令反対運動などで官憲より逮捕・投獄された活動者でもあった。南方が紀州和歌山で誕生した慶応3年といえ、天理教では、「みかぐらうた」が教祖直々に口授された年であり、逝去した昭和16年は、一宇会を設立し、第1回集会所が開催され、12月8日の大東亜戦争勃発と同時に『論達』12号が公布された年であった。南方の一生は天理教史とシンクロしているような感じがする。彼は当時世上の天理教批判書などにも目を通し所感を述べている。「心地を清涼ならしむるものは禅に限らず。何でもそれほどの功は用いようであるものなり。故に弊事多きものを用いるに及ばず。今天理教の教祖の書きしものを見るに、実に意を鄙近に取りて人間に切実なる教えなり。そして、誰も彼も悪しというは、その教に弊事多く出て来たなればなり(以下略)。(法龍宛て書簡、明治36年8月8日)。